

令和7年度 学校評価実施報告書

学校名: 枚方市立津田南小学校
 校長名: 西 敦規

1. 学校教育目標

夢や目標に向かって主体的に、たくましく生き抜く児童の育成

2. めざす子ども像

①<元氣な子ども>命を大切に、よく遊び、心身ともに健康な子ども ②<明るい子ども>自他ともに大切にし、思いやりのある子ども ③<考える子ども>自分で気づき考え、判断・行動し、最後までやりぬく子ども

基本方針	重点項目	具体的な取組内容				
		本年度の重点的な取組(4月)	取組指標(誰が、何を、どのくらいの頻度で)	評価指標(目標)※具体的な数字を入れる	指標の結果	分析(成果と課題)
確かな学力と自立の力を育む教育の充実	主体的な学びの実現	「主体的・対話的で深い学び」の実現	児童の主体的な学びを全教職員で推進するとともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両立させ、児童の学力向上を図る。(毎日)	・児童「自分にあった方法や学び方を選ぶことができる」：【肯定74%⇒79%以上】 ・児童「自信をもって考えを書いたり、伝えたりできる」：【肯定76%⇒79%以上】 ・児童「問題を解決するために、様々な方法を見つけて実行できる」：【肯定72%⇒76%以上】	・児童「自分にあった方法や学び方を選ぶことができる」：【肯定91%】 ・児童「自信をもって考えを書いたり、伝えたりできる」：【肯定76%】 ・児童「問題を解決するために、様々な方法を見つけて実行できる」：【肯定86%】	①見通しをもたせるために、単元計画の作成・提示が広がったことで児童が学習の道筋を理解した上で、活動に取り組む場面が増加した。これにより、「自分に合った方法や学び方を選ぶ」「問題解決のために多様な方法を見つけて実行できる」など主体性に関する指標が高水準となり、学びに向かう姿勢の定着が進んだ。 ②全教職員で進めた授業改善や相互授業参観の取組みを通じて、落ち着いた学習環境に結びつき、児童の学習満足度を押し上げた。ただし、「授業が分かりやすい」は90%と高水準だが、目標に達することはできていないので、さらなる学習活動の質を高める必要がある。 ③表現力の育成においては、発表や記述場面での自信をもって考えを書いたり伝えたりできるという観点で伸び悩みが見られ、学年・児童間の差も残った。 ④5Cを意識した授業づくりの推進により、授業で自分の考えを深めたり広げたりする経験が増え、学習への内発的な動機づけが強化された。 ⑤将来の夢や目標をもつことに関する肯定的指標も良好で、様々な経験や学びが自己の将来像へと結びついていることがうかがえる。 ⑥教職員においても5Cの視点を授業設計に反映する意識が高まり、対話・協働による思考を深める活動が日常化したことが、授業の質向上や児童の主体性に寄与した。 ⑦週1回の読書活動の継続と学校図書館の蔵書充実、読み聞かせボランティアによる読み聞かせ活動や給の広場の取組みにより、「読書は好きだ」という児童の肯定率が上昇し、読書への親和感が高まった。読書活動は、語彙の拡充と知識の形成に資するだけでなく、学習への集中にも寄与し、授業での思考・対話の質を支えるものと考えられるので、今後も継続していく。
	5Cを意識した授業づくり	5C(チャレンジ・コミュニケーション・クリエイティブ・クリティカルシンキング・コラボレーション)を意識した授業づくり	・児童「将来の夢や目標を持っている」：【肯定81%⇒85%以上】 ・児童「授業で自分の考えを深めたり、広げたりできる」：【肯定74%⇒80%以上】 ・教職員「5Cを意識した授業づくりを行っている」：【肯定71%⇒80%以上】	・児童「将来の夢や目標を持っている」：【肯定85%】 ・児童「授業で自分の考えを深めたり、広げたりできる」：【肯定84%】 ・教職員「5Cを意識した授業づくりを行っている」：【肯定77%】		
	校内研究と相互授業参観の推進	相互参観授業の推進と授業改善	学力向上部を中心に校内組織体制を確立し、校内研究を推進する。公開授業だけではなく全教員による相互参観を設定し、互いに見合い高める取り組みを推進する。(年間2回×33人)	・児童「授業が分かりやすい」：【肯定91%⇒94%以上】 ・児童「落ち着いた雰囲気や学ぶことができる」：【肯定70%⇒75%以上】 ・教職員「単元の初めに単元計画を作成して示している」：【肯定85%⇒90%以上】	・児童「授業が分かりやすい」：【肯定90%】 ・児童「落ち着いた雰囲気や学ぶことができる」：【肯定76%】 ・教職員「単元の初めに単元計画を作成して示している」：【肯定90%】	
	読書活動の推進	読書を通した「ことばの力と想像力」の育成	読書活動を通し、児童の豊かな心を育てる。(週1回)また、学校図書館の蔵書を充実させ、児童の情報活用能力の育成を図る。	・児童「読書は好きだ」：【肯定71%⇒75%以上】 ・教職員「子ども達に読書活動を推進する取組を行っている」：【肯定80%以上】	・児童「読書は好きだ」：【肯定77%】 ・教職員「子ども達に読書活動を推進する取組を行っている」：【肯定70%】	
豊かな心と健やかな体を育む教育の充実	児童理解の充実	児童理解に基づいた、児童に寄り添う指導の徹底	児童と信頼関係を築き、児童理解に基づき指導にあたる。一人一人が高い人権意識を持ち、正しい理解を深め多様な価値観を尊重する。児童の個性や背景等を適切にアセスメントし、共感・傾聴・認めるを意識した指導の徹底を図る。	・暴力行為件数：【7件⇒3件未満】 ・児童「自分にはよいところがあると思う」：【肯定73%⇒78%以上】 ・児童「先生は私たちの話をよく聞いてくれる」：【93%⇒95%以上】 ・児童「学習や係活動で頑張ったことを褒めてくれる」：【肯定79%⇒84%以上】	・暴力行為件数：【6件】 ・児童「自分にはよいところがあると思う」：【肯定85%】 ・児童「先生は私たちの話をよく聞いてくれる」：【肯定92%】 ・児童「学習や係活動で頑張ったことを褒めてくれる」：【肯定87%】	
	生徒指導体制組織の確立	発達支持的生徒指導を中心とした、組織的な生徒指導体制の構築	体罰を許さない指導体制を確立し、児童を真に大切にすることで学習活動を展開する。発達支持的生徒指導を浸透させるため、生徒指導担当者を中心とした生徒指導体制を構築し、課題対応からの脱却と積極的な生徒指導への転換を図る。	・児童「学校に行くのは楽しいと思う」：【肯定81%⇒85%以上】 ・児童「挨拶や約束を守ることを大切にしている」：【肯定87%⇒92%以上】 ・教職員「子どもの自己肯定感が高まるような学級経営や授業づくりを行っている」：【肯定97%⇒100%】	・児童「学校に行くのは楽しいと思う」：【肯定83%】 ・児童「挨拶や約束を守ることを大切にしている」：【肯定92%】 ・教職員「子どもの自己肯定感が高まるような学級経営や授業づくりを行っている」：【肯定97%】	
	主体的な特別活動の推進	児童を中心とした主体的な特別活動の推進	児童主体の委員会活動やクラブ活動を推進する。各委員会で学校をより良くするためのアイデアを考え、それを待ち寄り協議する委員長会議を設立する。また、児童主体の縦断り交流会を開催する。(年間9回以上)	・児童「地域や社会をより良くするために何をすべきかを考えることがある」：【肯定63.5%⇒70%以上】 ・児童「みんなでなにかをすることは楽しい」：【肯定92%⇒94%以上】	・児童「地域や社会をより良くするために何をすべきかを考えることがある」：【肯定77%】 ・児童「みんなでなにかをすることは楽しい」：【肯定92%】	
	いじめ・不登校対応の充実	組織的ないじめ対応・不登校対応の実現	いじめを積極的に認知するとともに、一人で抱え込むことなく適切且つ組織的な対応を行う。児童の状況を把握し、きめ細かく適切な対応を行うとともに、いじめ・不登校対策委員会を機能的な組織にする。	いじめの認知件数：【95件⇒60件以上】 ・不登校者数：【14人⇒10人以内】 ・児童「いじめはどんな理由があってもだめ」：【強肯定77.5%⇒80%以上】 ・保護者「いじめのない学級づくりに取り組んでいる」：【肯定94%⇒97%以上】 ・児童「担任の先生以外にも相談できる先生がいる」：【81%⇒84%】	いじめの認知件数：【81件】 ・不登校者数：【12人】 ・児童「いじめはどんな理由があってもだめ」：【強肯定81%】 ・保護者「いじめのない学級づくりに取り組んでいる」：【肯定88%】 ・児童「担任の先生以外にも相談できる先生がいる」：【肯定80%】	
食育の推進	食育や給食を通した、食についての理解と健康な体づくりの推進	栄養教諭を中心に、給食(毎日)や食育(全21回)を通して、食についての理解を深め健康な体づくりを推進する。食物アレルギー疾患の児童については、安心して学校生活を送ることができるよう、個々の状況に応じた対応に努める。	・児童「授業や給食で食の大切さを学んでいる」：【肯定85%⇒88%】 ・保護者「子どもと家で食に関する話をすることがある」：【73%⇒76%】	・児童「授業や給食で食の大切さを学んでいる」：【肯定92%】 ・保護者「子どもと家で食に関する話をすることがある」：【肯定87%】		

教職員の資質と指導力の向上	服務規律の徹底	効果的な服務研修の実施と不祥事防止の徹底	法令を遵守し、教職員として相応しい言動や倫理観の確立に努める。不祥事防止の徹底を図るため、資料（不祥事防止に向けたワークシート集改訂版等）を活用して、自ら考える機会を取り入れた校内服務研修等を実施する。（年6回）	・本校教職員の不祥事件数：【0件】 ・校内服務研修回数：【6回以上】	・本校教職員の不祥事件数：【0件】 ・校内服務研修回数：【6回】	①本年度も教職員の不祥事は0件であり、服務意識の高さが維持されている。 ②校内服務研修を年6回実施し、不祥事防止に向けたワークシート活用など、教職員自身が考えながら学ぶ研修を継続したことで、法令遵守や倫理観の向上が図られた。しかし、服務研修の内容理解や実践への落とし込みには個人差があり、校務の忙しさから、組織として危機管理意識を高い水準でそろえるには課題が残る。 ③校長を中心に業務改善を進め、働き方改革への肯定率が向上した。電話対応時間の設定、行事や業務の見直し、研究日・成績処理期間の明確化により、教材研究や児童と向き合う時間の確保が進んだ。 ④職員室環境の整備も進み、労働環境の改善につながったが、依然として多忙感が強く、業務量の差が職員間で不均衡となる場面がある。働き方改革に対する意識には個人差があり、重点化すべき業務や見直す業務について共通理解が十分でない。行事・会議の削減や効率化が、組織として徹底できていない点が課題である。 ⑤初任期教職員向けの校内自主研修が年間7回の実施にとどまっていたが、授業づくり・学級経営・生徒指導など基礎的力量的な向上が図られた。日常的なOJTも機能し、経験の浅い教職員を組織的に支える体制が整いつつある。先輩教員との連携を通して、学校文化の理解や実践力の習得が促進された。	服務研修を「考える研修」から「行動が変わる研修」へ発展させ、定着チェックや振り返りを組み込む。校内の事例や全国的事例を題材にしたケーススタディを充実させ、危機管理の視点を全職員で共有する。併せて、法令遵守・児童最優先の姿勢を全教職員が一丸となって維持する体制を構築する。 校務分掌・行事・会議の最適化を進める。ICT活用や資料共有方法の統一で事務作業を削減し、教員が専門性発揮に時間を使える体制を整える。働く喜びややりがいを高めるため、互いの強みを活かす協働文化を醸成し、職員の心身の健康にも配慮した職場環境を継続的に整備する。 初任者支援の年間プログラムを体系化し、授業・生徒指導・保護者対応など実務と直結した内容に再整理する。メンター制度を強化し、定期的な授業コーチングや振り返り面談を実施する。
	業務改善の推進	教職員の働き甲斐のある、働きやすい職場づくり	児童と向き合う時間や教材研究・準備・振り返りの時間を確保する為、行事・業務の精選に努める（月1回）。快適な労働環境や長時間勤務削減に向けて、電話対応時間の設定・周知や校内研究日・成績処理期間の設定（年12日）、職員室の環境整備の充実を図る。	・教職員「校長は校内の業務改善を図り、教職員の働き方改革に取り組んでいる」：【肯定80%⇒88%以上】 ・教職員「働き方改革を進めることで、意欲的に働き、自分の能力を高めることができた」：【肯定68%⇒75%以上】	・教職員「校長は校内の業務改善を図り、教職員の働き方改革に取り組んでいる」：【肯定88%】 ・教職員「働き方改革を進めることで、意欲的に働き、自分の能力を高めることができた」：【肯定81%】		
	人材育成と校内研修の充実	初任期教職員の育成	日常的なOJTによる研修を確立し、組織的・継続的に育成する。経験の浅い教職員を対象とした、自主研修を定期的（月1回）に初任期教職員Coに開催させ、専門性の向上を図る。	・初任期教職員向け校内自主研修回数：【12回以上】	・初任期教職員向け校内自主研修回数：【7回】		
学びのセーフティネットの構築	校内支援体制の充実	「ともに学び、ともに育つ」教育の充実	校内組織体制を整備して、「ともに学び、ともに育つ」教育の充実を図る。障がいのあるなしに関わらず、必要な児童に必要な支援を提供し、合理的配慮の観点を大切に取組みを推進する。（毎日）	・保護者「学校は保護者の相談に応じてくれる」：【肯定95%⇒97%以上】 ・教職員「『ともに学び、ともに育つ』の視点を意識して学級づくりをしている」：【肯定94%⇒96%以上】	・保護者「学校は保護者の相談に応じてくれる」：【肯定96%】 ・教職員「『ともに学び、ともに育つ』の視点を意識して学級づくりをしている」：【肯定100%】	①校内支援体制の整備により、保護者から「学校は相談に応じてくれる」、教職員から「ともに学び、ともに育つ視点を意識した学級づくりをしている」との肯定率が非常に高かった。特別な配慮を要する児童への理解も進み、合理的配慮に基づく支援が機能し、安心して学べる環境づくりが進展した。しかし、支援の質には担任による差が見られる等、対応の一貫性に課題が残る。 ②地震・火災・不審者対応に関して、どちらも目標値を下回っている。しかし、それぞれ97%・95%と極めて高い水準で、児童が基本的な安全行動を習得していると考えられる。保護者からも「学校は安全確保に努めている」という強い信頼が示された。 ③月1回の安全点検や年6回の訓練を継続することで、安全意識の定着が実現した。	校内支援チームの機能を強化し、支援の流れ（把握→計画→実施→検証）を学校全体で統一する。情報共有フォーラムやケース会議を定例化し、合理的配慮の指標や支援ガイドラインを明確化する。 SC・関係機関との連携を強め、学校全体で児童を支える協働体制を確立する。 安全点検と訓練を記録・改善するPDCAサイクルを確立し、マニュアルの再整備と全職員研修を通して危機対応力の標準化を図る。
	安全・安心な学校づくり	リスクマネジメントと「子どもが考え行動する」ことができる安全教育の実現	定期的（月1回）に安全点検を実施し、事故の防止に努める。災害や不審者等に備えた安全教育を充実させるとともに、実践的な防災・防犯訓練等（年6回）を実施し、常にその改善に努める。	・児童「地震や火災・不審者にあった際、どうしたら良いか知っている」：【肯定98%⇒98%以上】 ・保護者「学校は子どもたちの安全確保に努めている」：【肯定98%⇒99%以上】	・児童「地震や火災・不審者にあった際、どうしたら良いか知っている」：【肯定97%】 ・保護者「学校は子どもたちの安全確保に努めている」：【肯定95%】		
開かれた学校づくりの推進	保護者・地域への情報発信	学校だよりやブログ、オープン参観を通じた情報発信	学校だより（月1回）や学校ブログ（毎日）を通して、日々の教育活動の発信に努めるとともに、保護者や地域の方に土・日曜参観（年2回）やオープンスクール（年1回）等を通して、子どもたちの頑張りを実際に見て頂く機会を設定する。	・保護者「学校の様子や、学校便利・ブログでよくわかる」：【肯定92%⇒94%以上】 ・保護者「授業参観や懇談の回数は適切である」：【肯定80%以上】	・保護者「学校の様子や、学校便利・ブログでよくわかる」：【肯定97%】 ・保護者「授業参観や懇談の回数は適切である」：【肯定96%】	①学校だより（月1回）・学校ブログ（毎日）の継続的な発信により、保護者から「学校の様子がよくわかる」との肯定率が非常に高く、学校の透明性が大きく向上した。 ②授業参観や懇談の回数についても肯定的な評価が多く、家庭と学校をつなぐコミュニケーションの信頼性が高まった。情報発信の工夫により、地域の方々にも学校の取組が届きやすくなり、開かれた学校づくりの基盤として機能している。 ③学校運営協議会を年間4回実施し、「学校は保護者や地域との連携・協力を努めている」という肯定率が高いなど、地域と学校が協働して教育を支える仕組みが機能している。 ④地域人材の協力や活動参画も広がり、学校教育活動の改善・充実に寄与している点は大きな成果である。	地域向けには掲示板・自治会広報との連携を図り、地域が学校を理解し参画しやすい仕組みを整える。 保護者アンケートを通して情報ニーズを定期的に把握し、効果的・効率的な発信体制を構築する。 学校運営協議会の議題や決定事項を整理し、学校だより等で保護者・地域へ透明性高く発信する。 地域人材バンクを整備し、学校教育活動（学習支援・行事協力・安全見守り等）とのマッチングを促進する。 活動の見える化と役割の明確化により、持続的で協働的なコミュニティスクール体制を確立する。
	コミュニティスクールの推進	効果的・機能的なコミュニティスクールの推進	コミュニティスクールの取組みを通し、学校運営に地域住民や保護者等が参画するとともに、地域人材の協力を得ながら、校区の特徴を生かして、特色ある教育活動を推進する。	・保護者「学校は保護者や地域との連携や協力を努めている」：【肯定94%⇒96%以上】 ・学校運営協議会開催回数：【4回以上】	・保護者「学校は保護者や地域との連携や協力を努めている」：【肯定95%】 ・学校運営協議会開催回数：【4回】		

学校関係者評価（学校運営協議会または学校評議員と保護者からなる学校関係者評価委員会による）年度末	
評価結果	改善に向けた方策
<p>単元計画の提示や相互参観の定着により、児童の主体性・見通しをもった学習が進展している点は高く評価できる。</p> <p>5Cを意識した授業づくりは前進しているが、学年・教員間にばらつきが残るため、組織的な均質化が今後の課題である。「授業が分かりやすい」「落ち着いて学べる」等の肯定率が高く、授業改善が学級経営の安定に寄与している。</p> <p>表現力の伸び悩みが課題である。「自信をもって書く・伝える」など表現指標の伸長は相対的に弱く減少もみられるため、系統的な表現指導の強化が必要である。</p> <p>多様化複雑化する中で、学校は様々な苦勞があると推察。子どもが本音で話せる相談しやすい環境づくりや暴力行為減少等、徐々に生徒指導の基盤が強化されている。</p> <p>いじめの積極認知と早期対応は機能しているが、不登校者数は新規・継続が6人ずつと依然として課題。個別対応や新規を生まない更なる精度化が求められる。また、いじめについての保護者理解に対して学校からの発信がもっとあっても良いのではないかな。</p> <p>蔵書充実と読書ボランティアの活用等により、「読書が好き」が増えたことは評価できる。また、朝読書も効果的だと思われているのでこれからも取り入れてもらいたい。</p> <p>安全教育・訓練・点検は計画的に実施され理解度も高いが、「子どもが状況判断する・主体的に行動できる」といった対応への深化が今後の課題である。</p> <p>開かれた学校づくり：学校便利・ブログの評価は高いが、コミュニティスクールでの意見反映や地域参画の見える化は一層の工夫が望まれる。さらに、保護者や地域の持っている力（ソース）を利用して、さらなる教育活動の充実に繋げられれば良いのではないかな。</p>	<p>5Cの行動指標を常に意識できる環境を整え、校内研究も含めて発問・活動・評価等を整備して学年間の均質化を図る。</p> <p>相互参観後は児童ノート・発言記録・形成的評価を用いて効果検証し、再設計する。</p> <p>書く・話すスキル、表現力の向上を図るため、単元ごとに必ずアウトプット課題（要約・意見文・討論等）を位置付ける。</p> <p>専門家を含んだケース会議を定例化し、アセスメントに共有→対応→検証を月次で実施、役割分担も明確化していく。</p> <p>いじめ・不登校の初動対応を強化するため、時系列記録、個別指導（別室・段階復帰・オンライン）等をマニュアル化し、関係機関と連携する。</p> <p>読書記録の統一、ブックトーク等を教科単元に組み込み、言語活動へ生かされるように設計する。</p> <p>学校便利・ブログ・CS議事等の役割を再定義し、意思決定と成果をさらに発信し、地域人材の参画窓口も明示していく。</p> <p>働き方×授業力の両立のため、負担を削減し、授業研究や児童対応に時間を再配分したり、メンター制度を強化したりする。</p>